

日本甲虫学会 第7回大会

講演要旨集

2016



*The 7th Annual Meeting of
the Coleopterological Society of Japan
The Abstract of Presentations
Osaka, 2016*

大阪市立自然史博物館

共催：日本甲虫学会・大阪市立自然史博物館

開催：2016年11月26日(土)・27日(日)

日本甲虫学会

日本甲虫学会は、甲虫学の発展と甲虫研究者および愛好者の交流を目的として、機関誌（欧文誌・和文誌等）の発行、年次大会（総会を含む）、地方例会（東京・名古屋・大阪）および調査観察会を開催しています。また、自然保護委員会では甲虫類に関わる保全活動を行っています。これら学会活動に関する情報はすべて、ホームページで閲覧することができます。

機関誌は、欧文誌「Elytra, New Series」が年2回、和文誌「さやばね ニューシリーズ」が年4回発行されています。このうち欧文誌は、原著論文のみの掲載となりますが、和文誌は原著論文以外にも、分類群の解説、研究方法の紹介、短報などを掲載し、幅広い会員層の要望に応える誌面作りを行っています。また、不定期刊行物として、特別報告や地方甲虫誌なども随時発行しています。学会の機関誌等のバックナンバーについては、「昆虫文献六本脚」(kawamo.co.jp/roppon-ashi/)より委託販売しておりますので、そちらをご利用ください。

また当会の出版物は過去5年分を除いて、PDFにて公開する作業を進めていますので、ご利用ください。

学会行事のうち、年次大会は年1回、調査観察会は年1回、地方例会はそれぞれ東京例会（3回）、名古屋例会（2回）および大阪例会（3回）となり、合計すると年10回の行事開催となります。会員はいずれの行事にも参加することができますし、非会員であっても、地方例会や調査観察会に参加することが可能です。甲虫に興味のある方はぜひとも例会にお越しください。

表紙写真：カスガキモンカミキリ

Paramenesia kasugensis (SEKI et KOBAYASHI, 1935)

奈良県の春日山から得られた標本に基づいて関と小林によって記載された。北海道、本州、四国、九州の他、対馬からも得られるが個体数は多くなく、その格調高い姿から人気がある。

目 次

連絡事項	2
会場案内図	4
大会日程	5
基調講演の演者紹介	8
講演要旨	9
公開講演会	9
論文賞記念講演	9
一般講演	9
ポスター発表	17
分科会	21
大会参加者名簿	24

日本甲虫学会第7回大会実行委員会

大会会長：林 靖彦

実行委員会：澤田義弘（委員長）、安藤清志、伊藤建夫、伊藤昇、
奥田好秀、初宿成彦、谷角素彦、野村英世、安井通宏、山内健生

連絡事項

<受付>

11月26日(土) 9:30から、メイン会場入口付近で受付を始めます。大会参加費と懇親会費をお支払いください。なお、新年度の会費も受け付けます。

<名札>

名札は大会参加証です。開会中は大会会場のほか、展示室での展示見学や植物園内へもお入りいただけます。館内では常に着用して下さるようお願いいたします。なお、2日目のお帰りの際は、名札は受付へお返しく下さい。

<懇親会>

館内ナウマンホールで第1日目の18:00から開催します。当日での新規お申込みについては、受付でご相談ください。

<休憩室>

館内の新実習室J(全日)と集会室S(分科会時間帯以外)・会議室K(同)が休憩室です。

<喫煙>

館内、敷地内ふくめ、すべて禁煙です。喫煙所への案内はTの位置に案内が貼ってあります。

<昼食>

事務局では弁当などの準備はしませんので、各自でご用意ください。カフェテリア「フォレスト」もありますが、座席数は多くありません。長居駅までの間に、ファーストフード、コンビニ、ファミレスもありますが、弁当ご持参で休憩室(上記)でとられることをお勧めします。

<同定会>

第2日目の9:30からネイチャーホールで一般公開にて行います。甲虫学の後進育成に鑑み、大会参加のみなさまには広くご協力をお願いいたします。見てもらう標本をお持ちの際は必ず、マウントし、データラベルを付けてください。

<研究発表者・分科会世話人へ連絡>

・口頭発表は質疑含めて15分です。発表会場のパソコンはOSがWindows10、ソフトは

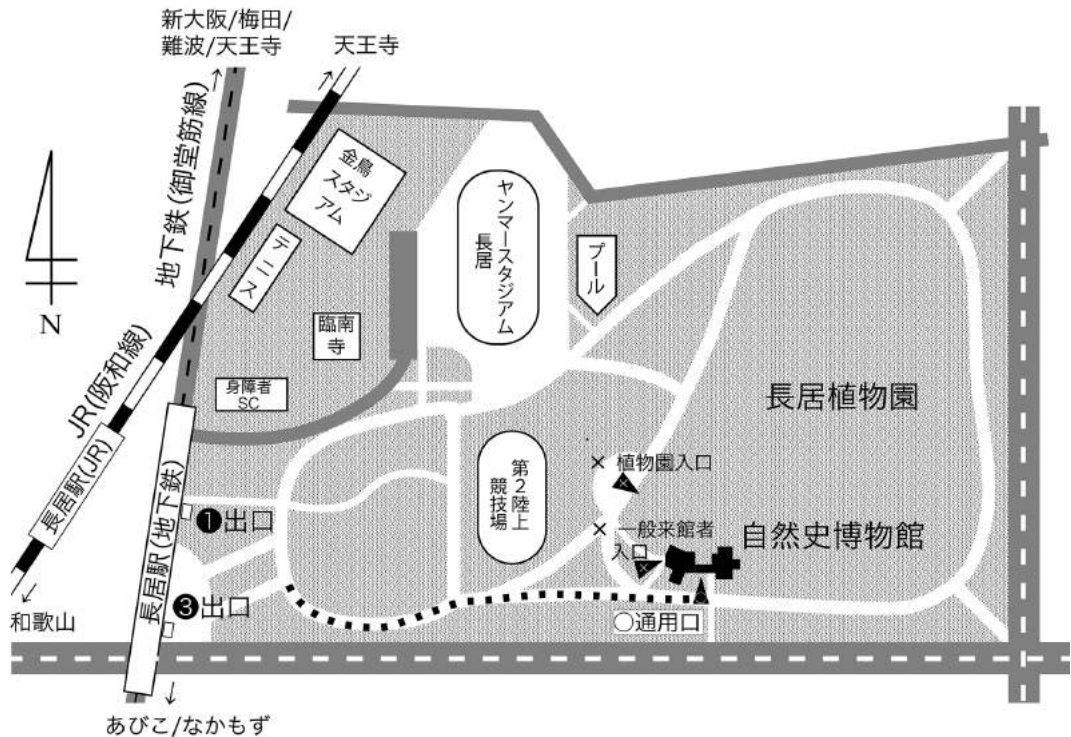
PowerPoint 2010 です。ご持参のパソコンやスマホも使用可とします。Mac や HDMI 経由の場合は各自の対応アダプタを必ず持参してください。

- ・ポスターは幅 90 cm × 高さ 180 cm のスペースを用意いたしますので、それに収まるよう作成してください。1 日目朝から貼付可能ですが、2 日目午前のセッションの時間帯は必ず貼っておくようにしてください。郵送による事務局（会場担当）の代理貼付も受け付けます。

- ・分科会は 2 部制にしているため、時間厳守をお願いします。プロジェクターは事務局で準備しますが、講堂 L（雑甲虫，水生甲虫を予定）以外はパソコンがありませんので、各世話人で準備するか、事務局にご相談ください。

<博物館案内>

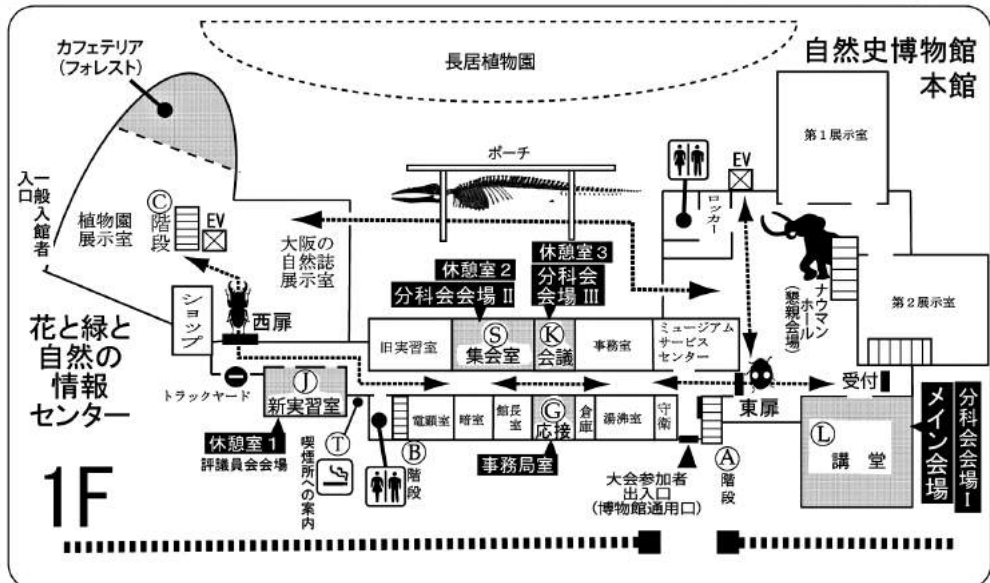
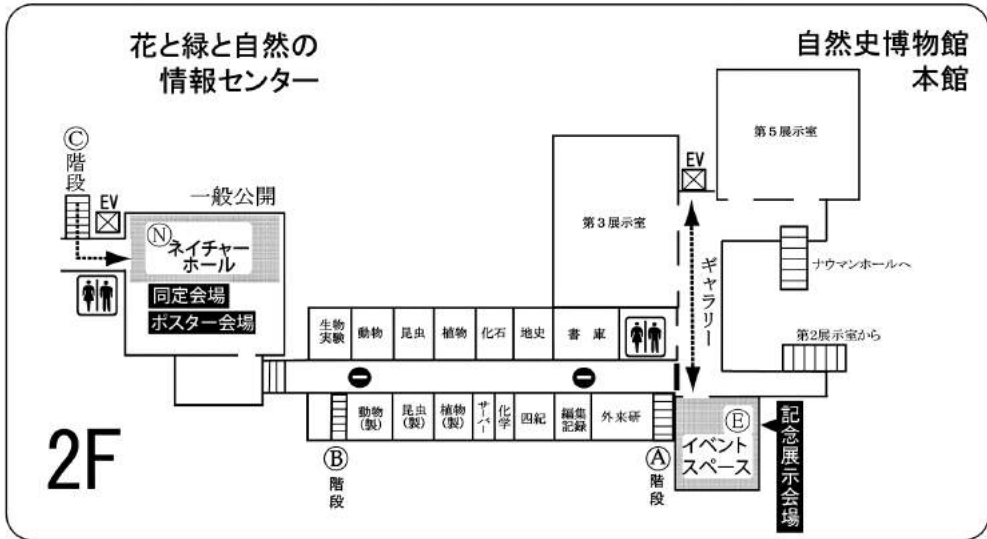
通用口からお入りください。



会場案内図

大阪市立自然史博物館・館内案内図

展示室内および ←————→ の印のところは、名札着用で通行できます。



大会日程

(時間や会場は変更になることがあります)

・ 1日目：11月26日(土)

09:30～ 大会受付開始

10:00～12:00 評議員会 (J: 新実習室)

13:00～14:45 公開講演会「関西甲虫研究史」(L: 講堂)

15:00～16:15 研究発表(口頭) 1 (L: 講堂)

16:30～17:45 総会・学会賞授与式・受賞講演 (L: 講堂)

18:00～20:00 懇親会

・ 2日目：11月27日(日)

09:30～11:00 甲虫標本同定会・ポスター研究発表 (N: ネイチャーホール [公開])

11:00～12:00 研究発表(口頭) 2 (L: 講堂)

13:00～15:00 研究発表(口頭) 3 (L: 講堂)

15:10～16:10 分科会・前半(雑甲虫L, カミキリS, ゴミムシK)

16:20～17:20 分科会・後半(水生甲虫L, ゾウムシS, ハネカクシK)

【公開講演会】 1日目： 13:00～14:45

基調講演：澤田 高平 (高槻市)

関西甲虫研究史 – 旧甲虫学会興隆期を語る –

【論文賞記念講演】

演者・演目：当日のご案内となります。

【一般講演：口頭発表】

1日目 15:00~16:15 (L: 講堂)

O-1 ○河上 康子 (大阪市博・外来研), 山崎 一夫 (大阪市環科研), 大橋 和典 (豊中市)
ダンダラテントウ大阪個体群の季節消長と寄主利用

O-2 棚橋 薫彦 (産業技術総合研究所・学振PD)
クワガタの酵母はどこから来たのか?

O-3 野村 周平 (国立科学博物館)
ハネカクシ上科甲虫における後翅基部前縁微細構造の走査型電子顕微鏡 (SEM) 観察

O-4 牧田 習 (北大)
日本・台湾産コブゴミムシダマシ科 Zopheridae に関する知見

O-5 丸山 宗利 (九大・博物館)
アジア産ヒゲブトオサムシ族の分類の進歩

2日目 11:00~12:00 (L: 講堂)

0-6 瑤寺 裕 (東農大・農・昆虫)

日本産チビタムシ族における雌雄交尾器の比較形態学的研究

0-7 ○荒谷 邦雄・細谷 嗣・小田切 顕一・楠見 淳子 (九大・院・比文)

ペット甲虫類をめぐる国内外来種問題の現状

0-8 林 成多 (ホシザキ野生生物研究所)

走査型電子顕微鏡によるヒメドロムシ科幼虫の体表構造の観察

0-9 ○久保田 耕平 (東大・院農), 曾田 貞滋 (京大・院理)

RAD シーケンス法による日本産ルリクワガタ属の系統解析

2日目 13:00~15:00 (L: 講堂)

0-10 ○朱 雪姣 (東大・院農), 金 鍾國 (江原大学校・森林環境保護), 久保田 耕平 (東大・院農)

Phylogeography of *Platycerus hongwonpyoi* (Coleoptera, Lucanidae) in South Korea based on mitochondrial COI gene

0-11 ○蔡 正隆 (国立中興大学・昆虫, 東大・院農), 久保田 耕平 (東大・院農), 葉 文斌 (国立中興大学・昆虫)

Population structure and genetic differentiation of a widespread lineage in *Neolucanus swinhoei* complex (Coleoptera, Lucanidae) across Taiwan Island

0-12 ○小林 卓也, 曾田 貞滋 (京大・理学・動物生態)

菌食甲虫ツヤツツキノコムシの分子系統と地理的分布, 形態, 寄主利用パターン

0-13 池田 大 (愛媛大・農・環境昆虫研)

雄交尾器内袋骨片形質に基づいた *Apalochrini* 族 (コウチュウ目: ジョウカイモドキ科: ジョウカイモドキ亜科) の再検討

0-14 ○伊藤 哲成, 吉富 博之 (愛媛大・農・環境昆虫研)

日本と台湾に生息するデバヒラタムシ属 (コウチュウ目, デバヒラタムシ科) について

0-15 ○十川 晃一, 吉富 博之 (愛媛大・農・環境昆虫研)

日本産ツヤテントウダマシ属 *Lycoperdina* (テントウダマシ科: オオテントウダマシ亜科) の分類学的再検討

0-16 草野 憲二 (郡山市)

福島県いわき市におけるカワラハンミョウの生息状況について

0-17 ○荻部 治紀 (生命の星・地球博物館)・森 英章・オガサワラハンミョウ再導入プロジェクトチーム

オガサワラハンミョウの域内・域外保全の現状について

【ポスター発表】(N: ネイチャーホール)

- P-1 初宿 成彦 (大阪市立自然史博物館)
近畿における 2016 年までのヒラズゲンセイの分布
- P-2 ○亀澤 洋 (川越市), 浅野 真 (帝装化成), 野村周平 (国立科学博物館)
日本産 Ebaeini 族 (ジョウカイモドキ科) の種構成について
- P-3 ○安井 通宏, 初宿 成彦, 大阪市立自然史博物館淀川水系調査グループ甲虫班
淀川汽水域におけるミズギワゴミムシ類の生息環境と発生量について
- P-4 土岐 和多瑠 (京大・生態学研究センター)
ホホビロコメツキモドキ属 (オオキノコムシ科コメツキモドキ亜科) における頭部の非対称性と産卵基質の関係
- P-5 ○鈴木 良芽 (九大・院・地社), 荒谷 邦雄 (九大・院・比文)
ノコギリクワガタの雄は, どのくらいで敗北から立ち直るのか
- P-6 大阪ヤマトオサムシダマシ保存会
大阪市立自然史博におけるヤマトオサムシダマシの保全活動
- P-7 ○高谷 佑生, ○岡 祐達, ○丹羽 光一郎, ○山田 龍冴, 池永 明史, 水谷 誠 (清風中学・生物部)
八尾市高安地域における地表性昆虫の調査
- P-8 細谷 忠嗣 (九州大学決断科学センター)
日本産コガネムシ上科甲虫 DNA バーコーディングプロジェクトの進行状況 その2
- P-9 ○塚本 珪一 (京都市), 西台 律子 (日本鳥学会)
京都御苑のコウチュウ類・宗方神社に営巣するアオバズクの食痕からの考察

【分科会】

- ◎雑甲虫分科会 (世話人: 生川 展行) 2日目 15:10 ~ 16:10 (L: 講堂)
- D-1 亀澤 洋 (川越市)
日本産 *Scryptia* 属 (ハナノミダマシ科ハナノミダマシ亜科) について
- D-2 平野 幸彦 (小田原市)
日本産 *Stephostethus* 属 (ヒメマキムシ科) の再検討
- ムナボソヒメマキムシの正体を探る -
- ◎カミキリ分科会 (世話人: 山迫 淳介) 2日目 15:10 ~ 16:10 (S: 集会室)
- D-3 松田 潔 (大阪府大・農)
ベトナム南部のカミキリムシ
- ◎ゴミムシ分科会 (世話人: 伊藤 昇) 2日目 15:10 ~ 16:10 (K: 会議室)
- D-4 森 正人 (環境科学大阪株式会社)
兵庫県のゴミムシ最近の話題

講演要旨

基調講演

関西甲虫研究史 – 旧甲虫学会興隆期を語る –

澤田 高平（高槻市）

「近畿甲虫同好會」の創立、昆蟲學評論の発行など、遺された事実を 70 年前にさかのぼって当時その場に居合わせた者として、演者らが持つ記憶、断片的な思い出を会員諸氏に公開することも、戦後の甲虫分類学の発展を知る上で意義あることではないかと考える。当時、会の中心的立場におられた方々、また戦後日本の新しい甲虫学者として指導的立場におられた中根猛彦博士を中心にご紹介してゆきたい。

論文賞記念講演

未定：当日のご案内となります。

一般講演：口頭発表

座長は前講演者が務めること：ただしプログラム最初の O-1, O-6, O-10 は事務局が座長をします。

O-1 ダンダラテントウ大阪個体群の季節消長と寄主利用

○河上 康子（大阪自博・外来研）、山崎 一夫（大阪市環科研）、大橋 和典（豊中市）
ダンダラテントウ *Cheilomenes sexmaculata* (FABRICIUS) の季節消長を、大阪市長居個体群において 2003-2011 年の期間、調査した (KAWAKAMI *et al.*, 2016)。その結果、本個体群は最大で年 3 世代を経過することがわかった。越冬を終えた成虫は、夏までに 2 世代を経たが、1 世代の年もあった。夏には成虫で活動を停止し、秋に産卵を再開して 1 世代を経た。本個体群は 1 年を通じて、長居公園の植栽植物に発生する 5 種のアブラムシ類を餌として利用していた。

本種の季節消長の年次変動と気象要因の関係を調べるため、越冬あけの成虫が初めて現れた日とその年の積算温度との関係、および成虫の初認、出現ピーク、終認の日と気象データとの関係を調べた。その結果、越冬あけ日と積算温度に相関はなかった。成虫の初認や出現ピークの日、最高気温や湿度などの気象条件が好ましいときにあらわれる傾向があった。本種は大阪市の都市公園において、植栽のアブラムシ類を利用し、気候や餌条件の厳しい夏季には活動を休止することにより、安定した個体群を長期間維持していることがわかった。

O-2 クワガタムシの酵母はどこから来たのか？

棚橋 薫彦（産業技術総合研究所・学振 PD）

クワガタムシ科の雌成虫は腹部末端に菌嚢（マイカンギウム）を持ち、その中に共生酵母を保持している。この酵母は産卵時に菌嚢から卵へと伝達され、幼虫の腸内や坑道内で食物の消化を助け、雌成虫の羽化時には再び菌嚢へと取り込まれる。このように共生酵母は何世代にもわたって垂直伝達されるため、クワガタムシと酵母の間には、種レベルで見ると、基本的には一対一の特異的な関係が成り立っている。一方で、クワガタムシと共生酵母の系統関係を比較すると、いくつかのクワガタムシのクレードで、生活史形質に適合した酵母を水平獲得した「共生酵母の乗り換え」の形跡がみられる。本講演では、これまでにクワガタムシの共生酵母に関して得られた知見を総括しつつ、クワガタムシと酵母の共生の歴史を紐解いていきたい。

0-3 ハネカクシ上科甲虫における後翅基部前縁微細構造の走査型電子顕微鏡（SEM）観察 野村 周平（国立科学博物館）

昨年の本大会一般講演において、野村・北川・斉藤（2015）は、コガネムシ上科甲虫の後翅基部前縁から屈曲部にかけて、3通りの微細構造が発達することを示した。今回演者は、ハネカクシ上科の以下の種について、微細構造の有無と構造の違いについて調査した：シデムシ科2亜科11種、ツヤシデムシ科1種、ハネカクシ科5亜科12種。

調査の結果、ハネカクシ上科については、1) 後翅屈曲部内側に短く幅広い蛇腹構造、2) 1) の先端部を被うようなフード状構造、3) 屈曲部付近に列生する小棘毛構造、の3種類が見いだされた。1) の蛇腹構造は、シデムシ科とハネカクシ科デオキノコムシ亜科、アリヅカムシ亜科の一部、およびハネカクシ亜科の全種に見いだされた。2) のフード状構造は、シデムシ科モンシデムシ亜科のみに見いだされた。3) の小棘毛構造は、ハネカクシ科のヨツメハネカクシ亜科、ニセマキムシ亜科、アリヅカムシ亜科に見いだされた。

本研究の一部は科研費（課題番号 24510333, 24120002）の助成を受けている。

0-4 日本・台湾産コブゴミムシダマシ科 Zopheridae に関する知見

牧田 習（北大）

演者は北海道大学学総合博物館（北海道札幌市）、国立科学博物館（茨城県つくば市）、大阪市立自然史博物館（大阪府大阪市）、国立台湾大学（台湾台北市）、台湾農業試験場（台湾台中市）所蔵の日本産・台湾産コブゴミムシダマシ科 Zopheridae 甲虫の標本について調査した。また台北市内で採集調査を行った。

日本産コブゴミムシダマシ科 Zopheridae については、近年、邦人研究者の研究により多くの知見が解明されてきた。しかしながら、演者の調査によって新たな分布記録、形態学な新知見が得られたので報告・解説する。

台湾産コブゴミムシダマシ科 Zopheridae については、2002年に出版された List of Chinese Insects Vol. II によると9属9種が知られるのみである。しかしながら、演者の調査によって多数の台湾未記録種、未記録属が見出されたのでそれらについて報告・解説する。

O-5 アジア産ヒゲトオサムシ族の分類の進歩

丸山 宗利 (九大・博物館)

ヒゲトオサムシ族はオサムシ科ヒゲトオサムシ亜科においてアリとの共生に特化した一群で、その名のとおりに触角が棍棒状や球状、籠状となり、さらには胸部の彫刻や脚の形態が特殊化したものも多く、きわめて特徴的な姿をしている。日本ではクロオビヒゲトオサムシが唯一の種として知られているが、台湾以南の熱帯アジアには種数が多く、アフリカに次いでヒゲトオサムシ族の多様な地域である。ただし、ヒゲトオサムシ族は基本的に珍種揃いで、姿形が美しいために標本が手放されにくいことから、研究材料の収集自体が困難な分類群でもある。演者は約 20 年前からこの分類群に興味を持ち、自ら東南アジア各地で採集を行ってきた。同時に、多くの方々から貴重な標本の援助を受け、最近になって、ようやくアジア産種の全体像が見えてきた。その実態の一つに多くの未記載種の存在があり、ここ数年は新種記載を進めている。本講演では、ヒゲトオサムシ族の全体像を解説するとともに、アジア産種の分類の現状や生態的な新知見、採集法等について報告する。また、分類学的研究をさらに進めるにあたり、標本のご提供をお願いする次第である。

O-6 日本産チビタママシ族における雌雄交尾器の比較形態学的研究

瑤寺 裕 (東農大・農・昆虫)

チビタママシ族 Tracheini は体長 2~6 mm 程の小型のタママシ類で、国内からは 2 属 32 種 (チビタママシ属 *Trachys*: 20 種, ヒラタチビタママシ属 *Habroloma*: 12 種) が知られている (大桃・福富, 2013)。本族の日本産種は KUROSAWA(1959) により分類学的研究が行われ、主な分類形質として、体形や毛斑の色調と形状、頭楯の幅と長さの比、前胸腹板突起の形状などが挙げられる。しかし、甲虫目の多くで分類形質にしばしば用いられる交尾器の記載、図示はなく、交尾器に見られる属や種の特徴は明らかにされてこなかった。そこで、日本産 2 属 26 種の雌雄交尾器を比較し、各形態の特徴と分類形質としての有用性を検討した。

その結果、以下のことが判明した。(1) 属間で、雄交尾器の中央片 (median lobe) と包片 (tegmen) の形状、雌交尾器尾毛 (stylus) の形状に差異が見られること、(2) 種間で、雄交尾器の中央片と包片の形状、雌交尾器半腹板 (coxite) における毛の配列、受精嚢 (spermatheca) の形状に差異が見られること。(3) 雄の腹部腹板第 9 節においても属、種ごとに若干の差異が見られること。

O-7 ペット甲虫類をめぐる国内外来種問題の現状

○荒谷 邦雄, 細谷 忠嗣, 小田切 顕一, 楠見 淳子 (九大・院・比文)

外来生物法の制定以来、日本でも国外外来種に対する規制や防除がようやく本格化したのが、もともと日本に生息している種であるためにその存在や影響が見えにくい国内外来種

への対応は大きく遅れている。移入先に容易に定着しその地域固有の個体群とも交雑が生じる上に交雑個体の識別が極めて困難な国内外来種はまさに「見えない脅威」であり、その対策は急務である。こうした現状にあつて、演者らは意図的に導入されたペット甲虫類を主たる対象に、形態測定学や分子遺伝学的な手法を利用して、国内外来種の実態把握や生態リスク評価、交雑個体の検出、在来個体群の進化的重要単位の認識やそれぞれの個体群の形態的・遺伝的特性の把握等を実施し、国内外来種の「見えない脅威」の可視化とそのリスク管理の実施を試みてきた。

本講演では、演者らの一連の調査研究の過程で得られた知見を紹介しつつ、在来の多様性保全のための効率的かつ効果的なペット昆虫問題の拡大防止策に関して議論したい。

O-8 走査型電子顕微鏡によるヒメドロムシ科幼虫の体表構造の観察

林 成多 (ホシザキ野生生物研究所)

ヒメドロムシ科幼虫の体表には、多様な形態の突起や毛・鱗片などの微細構造が存在する。この構造を観察するには、走査型電子顕微鏡観察が最も有用であるが、観察前に体表の汚れを取り除くことが重要である。また、乾燥方法によっては毛が倒れて体表に張り付いてしまうことがある。演者は真空凍結乾燥法を用いると、毛の構造がより観察しやすいことを確認した。

成虫の体表、特に腹面側にある毛や鱗片は、水中でごく薄い空気の膜を形成することから、プラストロン構造であると判断される。しかし、幼虫の場合、腹部末端節に発達した鰓があり、また体表に空気膜も認められないことから、体表構造がプラストロン構造であるとは考えにくい。また、ヒメドロムシ科の幼虫の多くの種では、体表に泥状の物質がこびり付いていることが多く、珪藻が付着することも稀ではない。微細構造の存在が付着物をより付きやすくしている可能性がある。

幼虫体表の微細構造は、属や種の同定をする上でも重要な形質である。しかし、いくつかの属においては、近縁種の識別は困難であった。

O-9 RAD シーケンス法による日本産ルリクワガタ属の系統解析

○久保田 耕平 (東大・院農), 曾田 貞滋 (京大・院理)

日本産ルリクワガタ属 *Platycerus* の系統解析については、形態形質にもとづくもの (KUBOTA *et al.*, 2009)、遺伝子データにもとづくもの (KUBOTA *et al.*, 2011) がある。後者では、形態解析、核遺伝子解析、ミトコンドリア遺伝子解析を総合的に考察した系統関係の仮説も提唱している。しかしながら、日本産本属 10 種は互いに近縁であるため、系統情報の豊富なミトコンドリア COI 遺伝子の解析では、種間交雑による遺伝子浸透が原因と思われる形態種と遺伝子系統樹の不一致が少なからず認められ、また核遺伝子の解析では、シーケンスが安定して得られる 28SrDNA 等の領域では変異に乏しく、系統情報が十分に得ら

れないという短所があった。このため、解析結果の頑健性にはなお疑問の残る点があった。

そこで、日本産ルリクワガタ属全種全亜種の主要な個体群と外群のチョウセンルリクワガタを材料として、次世代シーケンサを用いて得たRADシーケンスデータを解析したところ、トポロジーの支持率が非常に高い系統樹を構築することができた。この方法による系統樹はこれまでの解析結果とかなり一致するものの、新たに意外な系統関係をも示唆することとなった。

O-10 Phylogeography of *Platycerus hongwonpyoi* (Coleoptera, Lucanidae) in South Korea based on mitochondrial COI gene

(ミトコンドリア COI 遺伝子にもとづいた韓国におけるチョウセンルリクワガタの系統地理)

○朱雪姣(東大・院農), 金鍾國(江原大学校・森林環境保護), 久保田耕平(東大・院農)

Platycerus hongwonpyoi is widely distributed in China and Korea, and the only species of *Platycerus* distributed in Korean Peninsula, although ten different species of *Platycerus* are distributed in Japan. To study the phylogeography of *P. hongwonpyoi* in South Korea, we compared 784 bp sequences of the mitochondrial COI gene from 139 specimens from 16 localities distributed from northern part to the south, covered the most area of the South Korea. We found 45 haplotypes from *P. hongwonpyoi*. There, several major clades were detected. As the phylogenetic trees and haplotype network showed, the northern populations possessed only two major clades, while the southern populations highly diverged into several clades, some of which were found in the same areas; these populations were suggested to have come into secondary contact with each other during Pleistocene glaciations.

O-11 Population structure and genetic differentiation of a widespread lineage in *Neolucanus swinhoi* complex (Coleoptera, Lucanidae) across Taiwan Island

(台湾におけるアカマルバネクワガタ種群の広域系統の個体群構造と遺伝的分化)

○蔡正隆(国立中興大学・昆虫, 東大・院農), 久保田耕平(東大・院農), 葉文斌(国立中興大学・昆虫)

Neolucanus swinhoi complex, a group of stag beetles with limited flight capability and two-week adult lifespan, has been illustrated for their complicated phylogeographical history during Pleistocene glaciations. The study herein, two mitochondrial genes, i.e. COI and 16S rDNA, of 172 individuals from the widespread lineage were exploited to address their evolutionary history, especially to elucidate the origin of the eastern populations separated from others by the Central Mountain Range (CMR). Phylogenetic inference has shown a tendency of north-south genetic

differentiation and variance component was high within population. Meanwhile, molecular dating shown major diversifications were associated with Riss glaciations and the subsequent forming lineages were in correlation to the Last Glacial Maximum. Moreover, both genes have revealed that major haplotypes across all populations were affected by the possible expansion events during periodical glaciations. Although the CMR did play a vital role in their migration, the ancestors of eastern populations might have migrated via lower mountain areas of northern and southern CMR.

O-12 菌食甲虫ツヤツツキノコムシの分子系統と地理的分布, 形態, 寄主利用パターン

○小林 卓也, 曾田 貞滋 (京大・理学・動物生態)

ツヤツツキノコムシ *Octotemnus laminifrons* (ツツキノコムシ科: Ciidae) は全生活史をカワラタケなど革質の多孔菌類に依存する菌食甲虫である。前胸背板に光沢があり, 体長 2 mm 程度, オスは発達した大顎を持つといった形態的特徴から他種と区別される。演者らは北海道から南西諸島にかけて上記の形態的特徴を有する個体をサンプリングし, 分子系統解析を行った。その結果, 分化の大きな 4 つの系統が含まれることが明らかになった。現在までに分かっている地理的分布は, 近畿~関東にかけて分布する系統 (以下 A 系統), 東海~南西諸島にかけて分布する系統 (B 系統), 北海道~九州にかけて分布する系統 (C 系統), 北海道のみに分布する系統 (D 系統) となっている。これらの各系統は寄主として利用する多孔菌類の種類, 範囲にも違いがあり, A 系統はクジラタケ・チリメンタケから, C 系統はカワラタケ・アラゲカワラタケ・カイガラタケから, D 系統はカワラタケから, B 系統はこれら全ての多孔菌種から得られた。外部形態は基本的に類似しているが, C 系統のオス成虫については大顎の左右非対称性が著しい特徴がある。またオス交尾器の形態にはそれぞれの系統間で一定の違いがみられた。

O-13 雄交尾器内袋骨片形質に基づいた Apalochrini 族 (コウチュウ目: ジョウカイモドキ科: ジョウカイモドキ亜科) の再検討

池田 大 (愛媛大・農・環境昆虫研)

Apalochrini 族はジョウカイモドキ亜科の中でも触角に特徴のあるグループで, 世界から 32 属が知られている。触角第 2 節が非常に小さく, 第 1 節にほとんど隠れる特徴のほか, いくつかの属では雄の触角第 3 節が肥大しており, 重要な同定形質となっている。この中でイソジョウカイモドキ属 *Laius* とオビジョウカイモドキ属 *Intybia* については雄交尾器の内袋にある骨片が調査されており, 重要な同定形質であることに加え系統的特徴を強く表していることが報告されている (YOSHITOMI, 2014; IKEDA & YOSHITOMI, 2016 in press)。しかし, Apalochrini 族の他属では雄交尾器の内袋骨片について未検討である。本発表では雄交尾器の内袋骨片を用い, オビジョウカイモドキ属とそれに近縁な属との関係, および内袋骨片の形質としての有用性について検討した。

O-14 日本と台湾に生息するデバヒラタムシ属（コウチュウ目，デバヒラタムシ科）について

○伊藤 哲成，吉富 博之（愛媛大・農・環境昆虫研）

デバヒラタムシ科の *Prostomis* 属は現在，世界で 27 種が知られている小さな属である。日本からのデバヒラタムシ科の記録はデバヒラタムシ *Prostomis latoris* REITTER の 1 種のみだったが，SCHAWALLER（1992）が極東ロシアに分布する *P. mordax* RIETTER を記録したことで 2 種となった。一方，台湾には日本と同じデバヒラタムシ *P. latoris* が生息しているが，*Prostomis* 属の重要な分類形質である大顎や頭部腹面角状突起（jugular process）が日本産のものに似ているものの雄交尾器が日本に生息する個体群とは異なっていることがわかった。また，沖縄本島，石垣島に分布する個体群は本土のものに比べ体サイズが小さく，雄交尾器も異なる印象を受けた。しかし，琉球列島における *Prostomis* 属の標本は不十分であり今後，さらなる検討が必要である。本講演では，現段階で分かっている日本および台湾に生息する *Prostomis* 属についての検討結果について報告する。

O-15 日本産ツヤテントウダマシ属 *Lycoperdina*（テントウダマシ科：オオテントウダマシ亜科）の分類学的再検討

○十川 晃一，吉富 博之（愛媛大・農・環境昆虫研）

ツヤテントウダマシ属 *Lycoperdina* はオオテントウダマシ亜科に含まれ，旧北区から 18 種，エチオピア区から 9 種，新北区から 1 種知られる。日本からはこのうちクリバネツヤテントウダマシ *L. castaneipennis* GORHAM, 1874, フチトリツヤテントウダマシ *L. dux* GORHAM, 1873, セグロツヤテントウダマシ *L. mandarinea* GERSTAECKER, 1858 の 3 種が知られている。しかし，GORHAM（1887）は北海道から未記載種の存在を示唆しており，平野（2011）も本属を再検討した結果，既知 3 種と未記載種を 1 種認めている。

そこで，日本産の本属を外部形態および雄交尾器を用い再検討したところ，既知 3 種に加え 1 種の未記載種の存在が確認された。

O-16 福島県いわき市におけるカワラハンミョウの生息状況について

草野 憲二（郡山市）

福島県いわき市の 2 地点において，2009~2016 年にかけてラインセンサス法によりカワラハンミョウの個体数調査を実施したので，その結果を報告する。

2011 年 3 月の東日本大震災とそれに伴う津波により，いわき市南部の 1 地点は地盤の沈降と砂浜の縮小・分断が起り，個体数の大幅な減少が見られた。一方，いわき市中部の 1 地点では，テトラポットにより砂浜が保護され，生息環境に目立った変化がなく，2009 年よりも個体数は増加していた。

2012~2015 年まで，いわき市南部では徐々に個体数が増加し，大震災前の個体数にまで

回復してきた。一方、いわき市中部では2012年には若干個体数が少なくなったものの、2013~2014年には確認された個体数は2011年と同程度であった。

しかし、いわき市中部の2015~2016年、いわき市南部の2016年では、ほとんど確認できない状況となった。これは、人為的に個体数を減ずる影響があったものと思われる。

O-17 オガサワラハンミョウの域内・域外保全の現状について

○苅部 治紀, 森 英章, オガサワラハンミョウ再導入プロジェクトチーム

オガサワラハンミョウ *Cicindela bonina* は、小笠原父島列島固有種で、父島産の戦前の標本で記載されたが、1980年代の兄島での再発見までは長らく「幻の甲虫」として扱われていた。これは生息環境が台地上の乾性低木林内に点在する裸地だったことと、発生時期が秋季だったことも発見を遅らせた要因であろう。

再確認後しばらくは安定して多数が見られ、新産地も続々と見つかったが、2000年代になって各地から急速に姿を消した。父島のような侵略的外来捕食者が生息していない兄島での激減要因の解明は時間を要したが、急速に島内に繁茂したモクマオウ、リュウキュウマツの大量の落葉が裸地を被覆していったことが主要因と考えられている。その後も減少が継続したため、2000年代後半から外来樹木の枯殺を進め、同時に堆積したリターの除去も継続した。2014年までは減少が継続し、総巣穴数で500個体程度まで減少し絶滅が危惧されたため、それまでに確立した飼育技術で繁殖させた個体群の再導入を2015年から開始した。残存した個体数は少なかったが、再生した生息地で終齢まで生息できることは確認できた。域内保全の結果、個体数も2000頭近くまで回復させることができたので、その結果を報告する。

ポスター発表

P-1 近畿における 2016 年までのヒラズゲンセイの分布

初宿 成彦 (大阪自博)

ヒラズゲンセイ (ツチハンミョウ科) は、本州では和歌山県湯浅町で 1976 年に初めて見つかった後、北に分布拡大した。各府県での初発見は兵庫県 (淡路島を除く) で 1985 年、大阪府で 1994 年、奈良県で 2008 年、京都府で 2009 年、滋賀県で 2012 年となっていた。

真っ赤な目立つ甲虫であることから、ネット検索した方が見つけた日時・場所などを連絡もらえるようホームページで記しておいたところ、多くの情報が寄せられ、2016 年には三重県名張市・伊賀市、滋賀県野洲市・近江八幡市、兵庫県篠山市、京都府丹波市で初めて見付き、分布がさらに拡大しているらしいことがわかった。また、大阪市大正区・天王寺区・鶴見区・西淀川区、寝屋川市、四条畷市、高槻市、京都市中京区など、人口密度の高いエリアでも見付き、都市部へ広く進出してきたとみてよい。

P-2 日本産 Ebaeini 族 (ジョウカイモドキ科) の種構成について

○亀澤 洋 (川越市), 浅野 真 (帝装化成), 野村 周平 (国立科学博物館)

ジョウカイモドキ科 Ebaeini 族は、近年、WITTMER (1995, 1999) により大幅な分類学的再検討がなされたが、このとき日本産種に関してはほとんど見直されなかった。しかし、最近の研究 (ASANO, 2013; ASANO and KOJIMA, 2014) は、日本産種に関しても全体的な見直しが必要であることを示唆している。

今回、演者らは日本産 Ebaeini 族の各種について走査型電子顕微鏡 (SEM) を用いて形態を詳しく調べ、分類学的再検討を試みた。

この結果、日本においては、*Kuatunia* 属、*Holzschuhus* 属および *Hypomixis* 属の種分化が顕著で、これら 3 属が本族の大部分を占めていることが明らかとなった。3 属は中国南部においても局地的に多様化していることから、日本産 Ebaeini 族の種構成は、中国南部と関連がある可能性が示唆された。

P-3 淀川汽水域におけるミズギワゴミムシ類の生息環境と発生量について

○安井 通宏 (大阪市), 初宿 成彦 (大阪自博), 大阪市立自然史博物館淀川水系調査グループ甲虫班

淀川汽水域の流程は約 10 km、水際の護岸は大部分コンクリートか石垣である。自然環境は西島、中津、西中島にアシ原、木川に干潟がみられ、部分的に砂礫や砂泥の河岸がある。河口の矢倉緑地に人工潮溜まり、海老江と柴島に人工干潟がある。

演者らは、大阪市立自然史博物館の「淀川水系調査プロジェクト 2007-2010」で甲虫相を調査し (安井ら, 2011)、2012 年まで続けた。ミズギワゴミムシ類は定期的・定点的に

干潟，河岸でスプレー採集し，上水敷で土壌をサンプリングしてツルグレン抽出を行った。

その結果，本汽水域でミズギワゴミムシ族4種，コミズギワゴミムシ族7種がみられた。キバナガミズギワゴミムシは干潟砂礫地で夏季に1カ所30分当たり90頭以上を確認した。キバネキバナガミズギワゴミムシは干潟砂泥地，ハマベミズギワゴミムシ，ムツモンコミズギワゴミムシはアシ原砂泥地など満潮時汽水浸水域にいた。ヨツモンコミズギワゴミムシは汽水傍砂泥草地，汽水水路斜面砂礫地，上水敷でみられ，その他のコミズギワゴミムシ類は上水敷にいた。種別に生息地分布，季節的個体数変動など生態学的特徴が現れていた。

P-4 ホホビロコメツキモドキ属（オオキノコムシ科コメツキモドキ亜科）における頭部の非対称性と産卵基質の関係

土岐 和多瑠（京大・生態学研究センター）

ホホビロコメツキモドキ属（オオキノコムシ科コメツキモドキ亜科）は，アジアより40種が知られ，メスの頭部が左右非対称となるユニークな甲虫である。日本にはニホンホホビロコメツキモドキ1種が分布する。その非対称な頭部は，硬い竹に孔を開けて産卵するための適応的な形態であることが示唆されている。本発表では，日本を含めアジア各国で調査したホホビロコメツキモドキ属の頭部の非対称性と寄主植物の硬さや厚さの関係について議論したい。

P-5 ノコギリクワガタの雄は，どのくらいで敗北から立ち直るのか

○鈴木 良芽（九大・院・地社），荒谷 邦雄（九大・院・比文）

動物界において，餌や雌を獲得するために雄はしばしば直接的な闘争を行うが，闘争の結果によって，その後の行動を変化させる事例が報告されている。ノコギリクワガタ *Prosopocoilus inclinatus inclinatus* の雄は，発達した大腮を使って餌場や雌を巡る闘争を行うことで有名である。一方で，闘争の経験による行動変化についての研究は進んでいない。論者は，ノコギリクワガタの雄において闘争の勝敗の結果によって起きる行動変化について調査し，昨年の研究において，闘争に敗北した個体は接触刺激に対する反応が闘争前とは変化し，刺激から逃れるように刺激を受けた反対側へ移動することが明らかになった。こうした行動変化から，敗北個体は闘争を避けるようになったと判断されたが，敗北個体の闘争行動の回復に関しては不明なままであった。

そこで本研究では，闘争敗北後の個体に一定時間ごとに接触刺激を与えて反応を観察することにより，行動変化の持続時間を調査した。その結果，雄の闘争敗北後，数時間程度で闘争行動が回復している傾向が見られた。この回復時間はこれまでに観察された事象と比較して非常に短く，闘争敗北個体も一晩で再び闘争に参加している可能性が示唆された。

P-6 大阪市立自然史博におけるヤマトオサムシダマシの保全活動

大阪ヤマトオサムシダマシ保存会

ヤマトオサムシダマシは環境省レッドリストカテゴリー準絶滅危惧 (NT), また大阪府レッドリスト 2014 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) のゴミムシダマシ科の甲虫である。

2014 年 12 月, 第 13 回大阪例会において『ヤマトオサムシダマシへの興味と大阪府での保全方法の検討』(山本勝也・山下俊一) が口頭発表された。その後, 有志が集い 2015 年 1 月, 大阪市立自然史博物館, 初宿成彦先生ご指導のもと “大阪ヤマトオサムシダマシ保存会” が結成された。2015 年 6 月, 同館バックヤードに本種の好む直接雨の当たらない環境 “オサダマ小屋” を簡易テントで作成した。そこに元の生息地である大阪府茨木市, 山下俊一氏の農場小屋産より累代飼育した F₂ の 10♂10♀ を域外移入させた。

それと同時に水野弘造氏を中心としたメンバーにより, 各県ごとの詳細なデータ集積作業が始まった。保育社の「原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ)」によると, 本種の分布地は “九州” (中條, 1985) も含まれるが, 本調査では九州の記録を見出せずにいた。

2015 年 11 月, 第 6 回大会が北九州市立自然史・歴史博物館で催された。その際『ヤマトオサムシダマシ九州での記録ご教示のお願い』と題してポスター発表を行ったところ, 『九州からのヤマトオサムシダマシの一採集例』として鹿児島県の記録が発表された (亀澤, 2016)。

2016 年 7 月, 大阪市博 “オサダマ小屋” 内で新成虫 10 頭が確認された。これにより本種の生息域外保全の一つの形が示されたのではないかとと思われる。

P-7 八尾市高安地域における地表性昆虫の調査

○高谷 佑生, ○岡 祐達, ○丹羽 光一郎, ○山田 龍冴, 池永 明史, 水谷 誠 (清風中学・生物部)

清風学園生物部では 17 年前からニッポンバラタナゴの保護をおこなってきた。そこで, ニッポンバラタナゴの保護を行うには保護池の調査だけでなく, 周りの環境にも目を配ることが重要ではないかと考え, 保護池周辺の昆虫の調査を行った。その結果 400 種以上の昆虫を確認することができた。中にはウラナミジャノメやベニイトトンボといったレッドリストに記載されているような昆虫も何種類か確認することができた。さらに, より詳しく環境を調べるために環境指標性が高いといわれている地表性昆虫を調べることにした。

方法は毎月第三日曜日に行っている定期調査のときに丸山式 FIT やノムラホイホイなどのトラップを仕掛け, その翌週に回収するという方法を行った。他にも見つけ取りや材割りなどを行い, より細部まで目を配り細かく調査を行った。

その結果, 地表性昆虫は 147 種その内甲虫は 73 種見つけることができた。中にはアリヅカムシやアリヅカコオロギのような好蟻性昆虫なども見つけることができた。

P-8 日本産コガネムシ上科甲虫 DNA バーコーディングプロジェクトの進行状況 その2
細谷 忠嗣 (九州大学決断科学センター)

DNA バーコーディングは、特定の遺伝子領域の短い塩基配列である DNA バーコードを種の表徴として登録し、それに基づいて生物の検索・同定を促進するテクニックである。動物において、ミトコンドリア DNA の COI 遺伝子の 5' 端の領域が標準的なバーコード領域として規定されている。現在、日本産コガネムシ上科甲虫の DNA バーコードのデータ蓄積を進めるプロジェクトを進めており、全国各地の協力者の協力のもと日本産コガネムシ上科甲虫のサンプル収集を続けている。本プロジェクトでは、農林作物を加害する食葉性コガネムシ類や分布を拡大している外来種（国内外来種を含む）、遺伝的分化の進んだ ESU が存在する可能性のある島嶼域や高標高地の個体群を中心に DNA バーコード情報の蓄積を進めている。これにより、農業害虫や外来種の早期・簡便な同定・判別を可能にしていくとともに、種の遺伝的多様性管理のためのデータベースの構築を進め、生物多様性のモニタリングへの活用を図っていくことを目的としている。昨年の本大会において、その進行状況について発表したが、本発表では現時点でのサンプルの収集状況や DNA の解析状況について報告する。

P-9 京都御苑のコウチュウ類・宗方神社に営巣するアオバズクの食痕からの考察

○塚本 珪一 (京都市), 西台 律子 (日本鳥学会)

京都御苑は鴨川・高野川が合流し、周囲 4km の森である。この森は昔の京都のコアであり、現代は京都御所、大宮御所・仙洞御所、迎賓館に諸公家の住居跡に加え国民公園として成立する。植栽については環境省の管理下にあり、過去からの献木もある。従って幾つかの森の集合体である。それに加えて網目状の生態回廊が構造を構成する。報告はそのような構造の御苑には数カ所にアオバズクが営巣する。そして、アオバズクは南から飛来し、南へ帰るまでの間に 90% 昆虫食という生態をみせる。その間に丸呑み→調理・食べ残し=食痕→丸呑みの時刻がある。私たちはその食痕の採集物から考察したことを報告する。

分科会

☆雑甲虫分科会

D-1 日本産 *Scaptia* 属 (ハナノミダマシ科ハナノミダマシ亜科) について

亀澤 洋 (川越市)

ハナノミダマシ科 Scaptiidae (ゴミムシダマシ上科) の小甲虫は、2つのグループに分けられる。一見ヒメハナノミ類に似た種で構成されるフナガタハナノミ類 Anaspidinae と、本科の模式属を含むハナノミダマシ類 Scaptiinae である。過去にはナガクチキムシ科やハナノミ科とされたこともあるが、CROWSON (1955) は両者をハナノミダマシ科として一つにまとめた。

ハナノミダマシ類の代表的な属である *Scaptia* 属は、樹花のスウィーピングで多く採集される同科別亜科のフナガタハナノミ類の種にくらべると採集される機会が少なく、図鑑類にもあまり鮮明ではない図しか示されていないためか認識されにくく、記録も多くない。今回、演者は日本産種の概要を示すとともに、成虫や幼虫が得られる環境について自らの採集経験から解説する。また、幼虫の特異な形態についても紹介する。

D-2 日本産 *Stephostethus* 属 (ヒメマキムシ科) の再検討

– ムナボソヒメマキムシの正体を探る –

平野 幸彦 (小田原市)

日本産 *Stephostethus* 属は従来 *Stephostethus chinensis* (REITTER, 1877) ヒメマキムシともう1種 *Stephostethus angusticollis* (GYLLENHAL, 1827) ムナボソヒメマキムシが知られていたが、最近、高田・中村 (2002) は *Stephostethus pandellei* (BRISOUT de BARNEVILLE, 1863) を金沢市から記録している。演者の手元に日本産の *Stephostethus* 属の標本がいくつかあるので、検討した結果を報告する。また、図鑑などに図示されている *Stephostethus angusticollis* (GYLLENHAL, 1827) ムナボソヒメマキムシは真の *S. angusticollis* ではないと思われるので、お知らせしたい。

☆カミキリ分科会

D-3 ベトナム南部のカミキリムシ

松田 潔 (大阪府大・農)

甲虫類調査のため、ベトナム南部の Lam Dong 省と Dak Nong 省を訪れた。そのときに確認できた現地の状況とこの地域に生息するカミキリムシの生態について紹介する。

☆ゴミムシ分科会

D-4 兵庫県のゴミムシ最近の話題

森 正人（環境科学大阪株式会社）

演者は長年に亘りゴミムシについて調査してきた。そして現在兵庫県のゴミムシリストを順次作成し、NPO 法人こどもむしの会の会誌“きべりはむし”に発表している。本分科会では、兵庫県のゴミムシについて、標本や採集地の写真を交えながら興味深い種や生態について報告する。

☆水生甲虫分科会

D-5 日本産ヒメドロムシ科の系統解析

○小林 卓也, 曾田 貞滋 (京大・理)

日本産ヒメドロムシ科について、ミトコンドリアと核の遺伝子による系統解析を行った。解析には日本産の既知種の大部分を含む 140 個体に加えて、外群としてヒラタドロムシ科 5 種 5 個体を用いた。ミトコンドリア COI 遺伝子領域と、核のアルギニンキナーゼ遺伝子 (Argk) を PCR 増幅し、ダイレクトシーケンスによって得られたシーケンスデータを最尤法およびベイズ推定法によって解析した。その結果、*Stenelmis*, *Zaitzevia* および *Optioservus* 属の多系統性が示された。また、*Optioservus* 属のセアカヒメドロムシ種群 (*O. maculatus* 種群) に含まれる 7 種は互いに分岐が浅く、種の単系統性が示されなかった。高次分類群の系統関係については、ドロムシ科がヒメドロムシ科の内部に、ハバビドロムシ亜科がヒメドロムシ亜科の内部に位置したが、深いノードの分岐に関しては十分な支持が得られていないため、進化速度の遅い遺伝子領域の追加を含めたさらなる検討が必要である。

☆ゾウムシ分科会

D-6 日本産イツヒゲキクイゾウムシ族 Pentarthrini の概要

森本 桂 (福岡市)

日本のキクイゾウムシ亜科 *Cossoninae* は研究が遅れおり、現在の 53 既知種が約 160 種に増加する予定である。今回は、そのうち下書きの終了したイツヒゲキクイゾウムシ族について概要を報告する。この族は、触角中間節が 5 節の特徴を持つが、その他の分類形質を加えた再定義が必要である。この族には現在 51 属が含まれ、その多くがニュージーランドとその周辺やセイシェルに分布することから、南半球の族とされたことがある。日本からは、記録の上で *Conisius yaeyamanus* ナガチビキクイゾウ, *Pentarthrum agustissimum* イツヒゲキクイゾウ, *Tychiodes adamsii* ヒラタハバビロキクイゾウの 3 属 3 種が知られるが、今回の研究で、8 属 24 種の分布を確認した。属と含まれる種数は、下記の通りである。*Conisius* (2), *Coptodes* (1), *Microcossonus* (1), *Pentarthrum* (4), *Tyttoxydema* (2), *Toura* (12), *Rhinanisodes* (1), *Tychiodes* (1)。

D-7 日本産ホソクチゾウムシ科について

佐藤 隆志 (弘前市)

日本産ホソクチゾウムシ科は小グループで、小型・黒色な種が多いことから既知種は20種程度に留まっていた。現在はその詳細を把握すべく、同好の先輩諸氏の協力を得て見直しを行っており、その途中経過として *Kalcapiini* 族や *Miniapion* 属に加えられる未知種、*Perapion violaceum* ギシギシホソクチゾウムシの学名変更、分布や食草等について詳説したい。

☆ハネカクシ分科会

D-8 伊豆諸島産アリヅカムシ相の新知見

野村 周平 (国立科博), 亀澤 洋 (川越市)

2014年の本大会(倉敷市立自然史博物館)一般講演で筆者らは、伊豆諸島からのアリヅカムシの記録を取りまとめ、7つの島から27種を報告した。このたびさらに筆者らは、これまでの記録を加え、上記の27種のうち1種(*Leptoplectus?* sp.)が他の1種(*Pseudoplectus* sp.)と同一であることを発見した。また、この時点で未記録であったハナダカアリヅカムシ *Stipesa rudis* SHARP を伊豆大島、新島、神津島から確認した。これは東京農業大学昆虫学研究室所蔵の標本中から発見したものである。以上の削減、追加種(1増1減)の他にも各島からの新たな記録を多数追加した。以上の結果、9島のすべての島から27種が知られることとなった。

本研究の一部は科研費(課題番号24510333, 24120002)の助成を受けている。

大会参加者名簿

(2016年11月10日現在：アルファベット順，○は懇親会参加者)

- | | | | | |
|---|---------|----------|-----------|----------|
| A | ○足立 一夫 | ○伊澤 和義 | ○新里 達也 | 高野 光太郎 |
| | ○秋田 勝己 | K ○亀澤 洋 | ○西川 正明 | 高谷 佑生 |
| | 秋山 美文 | ○上手 雄貴 | ○西川 勝 | 滝 朋子 |
| | ○安藤 清志 | 神吉 正雄 | 丹羽 光一郎 | ○瑤寺 裕 |
| | ○青井 光太郎 | ○蟹江 昇 | ○野村 周平 | ○棚橋 薫彦 |
| | ○青木 淳一 | ○官能 健次 | O ○小川 直記 | 田中 勇 |
| | ○青木 哲郎 | ○苅部 治紀 | ○小川 遼 | 田中 敏明 |
| | ○新井 浩二 | 河上 康子 | ○大原 昌宏 | ○田中 良尚 |
| | ○有本 久之 | ○川村 玄季 | ○大林 延夫 | ○谷角 素彦 |
| C | ○茶珍 護 | ○川瀬 英夫 | 岡 祐達 | 土岐 和多瑠 |
| D | ○土肥 聖知 | ○小林 卓也 | ○岡田 亮平 | ○戸谷 研二 |
| F | ○藤本 博文 | ○小西 宏明 | ○岡野 良祐 | ○蔡 正隆 |
| | ○福田 侑記 | ○久保田 耕平 | ○奥田 好秀 | ○塚本 珪一 |
| H | ○韓 昌道 | ○黒田 悠三 | ○大木 裕 | ○恒石 大輔 |
| | ○春澤 圭太郎 | ○草野 憲二 | ○尾崎 俊寛 | ○露木 繁雄 |
| | ○長谷川 道明 | M ○丸山 宗利 | S ○齐藤 明子 | U ○植田 謙一 |
| | ○橋村 正雄 | ○的場 績 | ○齐藤 秀生 | ○植畑 亮 |
| | ○畑山 武一郎 | ○松田 潔 | 齋藤 琢巳 | ○烏頭尾 遼一 |
| | ○林 成多 | ○松尾 進 | ○佐藤 隆志 | W ○渡辺 昭彦 |
| | ○林 靖彦 | ○葦島 悠介 | ○佐藤 邦夫 | ○渡辺 崇 |
| | ○日暮 卓志 | ○三島 達也 | 澤田 高平 | ○渡辺 泰明 |
| | ○細谷 忠嗣 | ○三宅 規子 | ○澤田 義弘 | Y 山田 龍牙 |
| I | ○池田 大 | ○三宅 武 | ○下野 誠之 | 山地 治 |
| | 池永 明史 | ○宮本 剛 | ○司村 宜祥 | ○山本 ひとみ |
| | ○池竹 弘旭 | 水谷 誠 | 篠原 忠 | ○山本 勝也 |
| | ○今田 舜介 | 望月 寛人 | ○塩崎 明夫 | ○山本 雅人 |
| | ○今坂 正一 | ○森 正人 | ○初宿 成彦 | ○山迫 淳介 |
| | 稲畑 憲昭 | 森井 隆文 | ○十川 晃一 | ○山下 俊一 |
| | ○井上 晶次 | ○森本 桂 | ○杉山 悠生理 | ○安井 通宏 |
| | ○伊藤 主計 | ○森田 誠司 | 鈴木 良芽 | ○横関 秀行 |
| | ○伊藤 昇 | 元永 学 | ○鈴木 互 | ○吉田 一樹 |
| | ○伊藤 建夫 | ○村上 広将 | T ○多比良 嘉晃 | ○吉田 正隆 |
| | ○伊藤 哲成 | N ○内藤 準哉 | 胎中 悠丞 | ○吉田 貴大 |
| | ○伊東 善之 | ○生川 展行 | ○高橋 和弘 | ○吉富 博之 |
| | ○岩田 隆太郎 | ○新居 悟 | ○高井 泰 | Z ○朱 雪姣 |